

私のセカンドステージ

高齢者や農業支援の事務所を設立した
後藤 俊一さん(61)
 (宮崎市佐土原町)

自分と同じように年齢を重ねる人の困りごとや悩みを解消し、安心して人生が送れる手伝いをしたい。宮崎市佐土原町の後藤俊一さん(61)は今年4月、自身が持つ社会福祉士や社会保険労務士(社労士)などの資格を生かして、自宅に事務所「オフィス・アンヨネ」を開いた。

オフィス名の由来について「あんよね、ちよつと相談があるよ」というくらい、気軽に声を掛けてほしいとの思いを込めた」と後藤さん。続けて、「あんよね」をローマ字にすると『anyone』。英語では『だれでも』という意味がある。偶然気が付いたんだけどね」とユーモアを交え、にこやかに語る。

県庁マンとして、農政企画課や宮農支援課(当時)、県立農業大学の校長など、主に農政分野に携わってきた後藤さん。取得した資格はほかに、行政書士や宅地建物取引士、ファイナンシャルプランナー、普及指導員、家畜人工授精師、狩猟免許(わな)と驚くほど幅広い。これらの多くを現役時代に取得した。

老後の人生に安心を

幅広い悩みに寄り添う



「外回りが多く、事務所にいることはほとんどない」と話す後藤さん
 宮崎市佐土原町、オフィス・アンヨネ

「退職後に再就職しても、働けるのは基本的に65歳まで。自分で何かやれば70、80歳まで続けられるかとも思い、50歳から退職後のことを考え始めた」
 ほほ同じ時期に、父親が花や農地取得に関する書類作成や、介護サービスの量を買いすぎたり車

をぶついたりするようになり、認知症と診断された。「本も読むし、普通に生活していたのに。ショックだった」と後藤さん。この経験から、高齢者の役に立ちたいという思いを強くした。

4月の開所後から3カ月間は、事務所のホームページを作成するなど準備に費やした。「すぐに仕事は回ってこなかったが、これも想定内」と後藤さん。事務所開設と同時に、日本政策金融公庫の地域農業相談員として、担当している県内の農家を積極的に訪ね、困りごとなどに耳を傾けている。

「何度か接すれば親近感を持ってもらえるし、営業にもなる」と話す。妻の万智(55)は、遺品整理士の資格を取得しており、何かできればとの思いも抱く後藤さん。「もうけることより、少しでも長く人の役に立ちたい」と、人生の未来図を描き続けている。(徳留亜弥) 〓おわり〓

後藤さんの歩み

老後や福祉、農業の支援を行う「オフィスO(昭和55)年に県庁・アンヨネ」を宮崎市へ入庁。最初の配属先佐土原町に開設した後は県総合農業試験場(後藤俊一さん(61)は、県庁マンとして定年までさまざまな成果を上げてきた。同僚からは「改革の人」と呼ばれることも多い。東京本社の半年間、企業研修ティーの持ち主だ。出身は小林市野尻町。実家が畜産業を営んでおり、小林高を卒業後、宮崎大農学部で畜産を学んだ。1988

官民での経験生かす

- 20代まで**
 - 小林市野尻町に生まれる
 - 小林高、宮崎大農学部を卒業
 - 県庁に入庁
- 30~50代**
 - 農政企画課や県東京事務所、畜産課などで勤務
 - 県立農業大学の校長になる
- 60代**
 - 県庁を退職
 - オフィス・アンヨネ開設
 - NPO 法人みやざき男女共同参画推進機構理事長に就任



2002年、農業経(高鍋町)にいた10年。40分かけて通勤した。15年から定年まで務めた同校長時代は、農業経験のない入学者に対応できるように学科などを改編し、定員割れを改善。これらの仕事で得た官民の経験を生かし、今春新たな一歩を踏み出した。

